

佐久島しおさい学校における学び空間の広がりと住民意識

井澤研究室（インテリア・プロダクト分野） A22AB110 平井佐予

1. 研究背景と目的

人口減少に伴い、学校の統廃合は全国各地で見られる。特に過疎地域においては学校の統合だけでなく、子どもの激減により廃校となることが多い¹⁾。愛知県佐久島においても同様の傾向が見られ、学校の存続は島全体の課題である。一方、学校行事に島民が積極的に参加する、島外からの子どもの受入れ、島特有の教育を展開するなど学校の存続に地域全体が取り組んでいる。

本研究の目的は、佐久島の島民にとって学校はどのような存在であるのかといった、現状の学校の実態、役割を明確化し、学校だけでなく島内全域を学びの場としてどのように使用しているのかを明らかにすることである。

2. 佐久島と佐久島しおさい学校について

佐久島は、三河湾のほぼ真ん中にある面積 1.73 km²、人口 196 人、高齢化率 55.1%（2020 年）の離島である。また 1996 年からアートによる島おこしに取り組んでいる²⁾。

西尾市立佐久島しおさい学校は、佐久島唯一の学校であり、2019 年 4 月に佐久島中学校と佐久島小学校が統合して設立された義務教育学校である。義務教育学校とは、1 名の校長のもと、一つの教職員組織が置かれ、小学校と中学校の義務教育 9 年間を一貫して行う学校である。

また、2003 年から小規模特認校制度を適用して、島外（一色町本土）からの通学を認めたしおさい通学を始めた。2011 年 4 月に一色町が西尾市に編入合併したことで、対象が西尾市全域に拡大され、学校の生徒数を維持している。

2014 年から 2017 年までは島内から通っている島っこが全体の半数以上を占めていたが、2019 年からはしおかぜ通学者が島っこを上回った。また、2025 年現在ではしおかぜ通学者が 15 人、島っこは 6 人で、しおかぜ通学により学校の生徒数が維持されていることがわかった（図 1）。

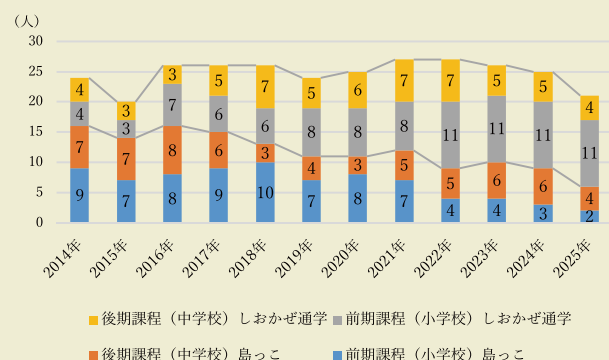


図 1 佐久島小中学校の在籍者数の推移と内訳

3. 研究方法

本研究では、①校長へのインタビュー②総合学習に関する過去 6 年分（2019 年～2024 年）の資料収集③島民に対するアンケートを実施した。

校長へのインタビュー項目は、教室利用の現状、島の学校特有のカリキュラムについてである。

アンケート調査は、1 世帯 1 人を対象に回覧板による配布・回収とし、2025 年 10 月から 11 月に実施した。全 110 世帯に対し 63 世帯から回答を得た（有効回答率 57.2%）。主な質問項目は、「学校へのかかわりについて」、「島民から見た学校の必要性について」、「学校の役割について」、「学校を存続させるために必要だと思うこと」である。

4. 居住年数による学校への考え方の違い

4-1 学校の必要性について

回答者の年齢は、60 代～80 代が全体の 70%を占めていた。居住年数においても 61%が 30 年以上と回答していた。学校の必要性について、全ての居住年数で「絶対必要」、「あった方がいい」と回答する人が全体の 78%を占めており、学校は島民にとって必要だと考えられていることがわかった。しかし、居住年数 30 年以上は、「学校の存続はそれほど問題ではない」又は「わからない」と回答した人がおり、島に住んでいる期間が長い方が学校の必要性を考えていない人がいることがわかった（図 2）。

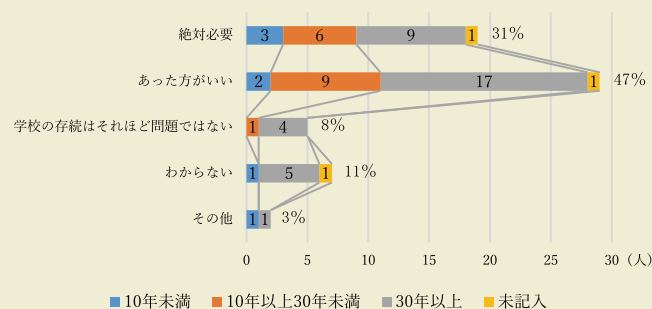


図 2 居住年数別にみる学校の必要性 N=62

4-2 学校の役割について

学校の役割については、「島の発展や過疎化させないための存在」と回答する人が 60%、「地域のコミュニティー」が 25%、「島の中枢・大切な場所」が 10%で、島民にとって学校は島の発展や地域の交流の場として捉えられていることがわかった。居住年数 10 年以上は、「わからない」と回答する人も一定数存在している。また、どの居住年数においても回答の人数が同じような結果になったことか

ら、学校の役割は島に住んでいる期間に関係なく、どの年代に取っても同じ役割であるという認識であった（図3）。

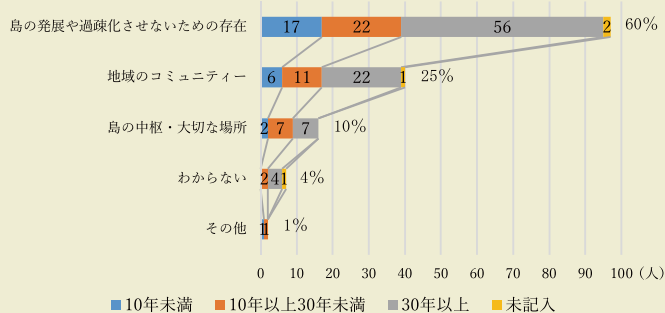


図3 居住年数別にみる学校の役割 N=162（複数回答）

4-3 学校の存続に必要なことについて

「就労場所や住宅などの環境整備」が124回答と、どの居住年数でも最も多く回答があり、居住年数に関係なく学校を存続させるために必要なのは人口増加につながる環境整備だと考えていることがわかった。また、「学校の存続は難しい」や「わからない」と回答したうち8%の13人が居住年数30年以上であり、回答する人の居住年数が長いほど学校を存続していくこと自体が難しいのではないかと考えていることがわかった（図4）。

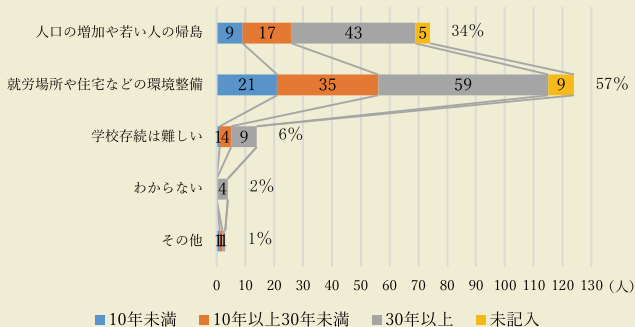


図4 学校の存続に必要なこと N=219（複数回答）

5. 人と学び空間の広がり

5-1 しおかせ学習について

しおかせ学習とは、1年間かけて「島の人・もの・こと」を教材に島を散策し、佐久島の魅力を知ること、これからの学習に生かす島特有の授業である。前期課程（小学校）1、2年生で、島を散策し佐久島の魅力を知り、前期課程3年生からは、1、2年を通して自分が興味を持ったことについて研究していく。また、自分で決めた研究テーマを次の年も引き続き研究する場合もある。後期課程（中学校）からは、グループに分かれて研究し、佐久島の海の生物についてや島に自生する椿など、自分の興味のあるテーマを研究している。

5-2 人と学びの場

過去6年間で子どもたちが学習を通じて関わりをもった教員、保護者以外の人物は78人であった。うち36%の

28人は島外の人であり、島内だけでなく島外にまで学びを広げていることがわかった（図5）。島内でインタビューやアンケートを受けたことがある人の職業は、自由業が22%、漁業、飲食店、民宿は17%だったことから、さまざまな職業から一様にインタビューやアンケートを受けていた（図6）。

しおかせ学習により子どもたちが学校の敷地だけでなく、島内全域を学びの場としていた。特にアート作品が設置された場所には必ず行っていること、東港、西港、大浦海水浴場、天神の浜といった海岸で学習を展開させていることがわかった（図7）。

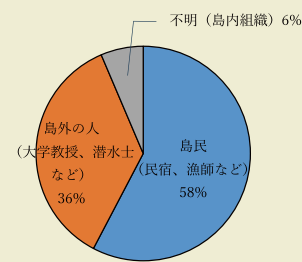


図5 関わる人物の内訳 N=78

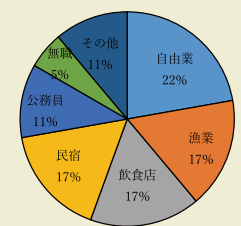


図6 島内でインタビューやアンケートを受けたことがある人の職業 N=18

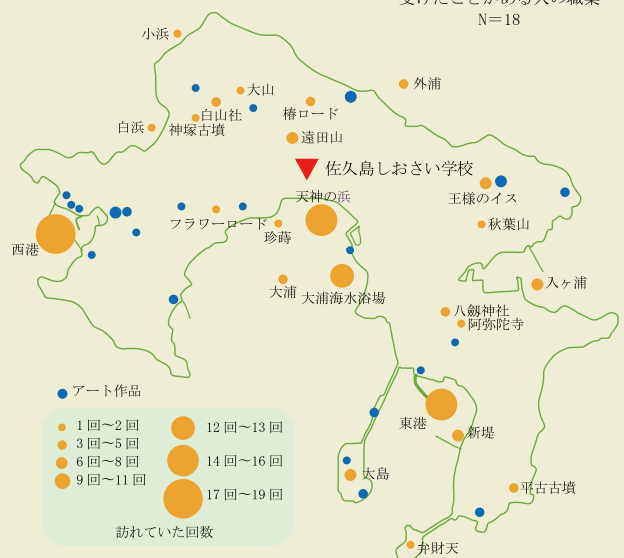


図7 しおかせ学習により佐久島内で訪れていた場所

6. まとめ

学校は島民にとって必要な存在であるとともに、居住年数30年以上は「学校の存在はそれほど問題ではない」、「わからない」と回答する人もいた。「学校の存続は難しい」と回答する人は、居住年数10年以上20年未満は4人、居住年数30年以上は9人と居住年数が長いほど学校の存続自体が難しいと考えていることが明らかになった。また、島特有のカリキュラムによって、島外の人と交流し、各地にあるアート作品や周りの海など島内全域だけでなく島外にまで学びの場を広げていることが明らかになった。

7. 参考文献

- 堀本雅章（2009）：沖縄地理/沖縄地理学会編（9）：「小規模離島における学校の役割と住民意識—沖縄県竹富町鳩間島の事例—」13-26.
- 佐久島公式ホームページ <https://sakushima.com/guide-top/outline/>